

令和4年度 栃木国体 レビューレポート

報告者 伊藤仰津紀(清水東高校)

視察試合

【青森県—北海道】

準決勝では、お互いにチームとしてのプレースタイルが似ているチーム同士の対戦となった。

先に行われた青森と北海道の試合ではお互いにロングボールを主体とする攻撃で、奪われた後の切り替えが速く、落ち着いた時間を互いに作らせなかった。ロングボールに対しては互いに攻撃の起点を作らせず、クリアの質も高いため弾いたボールを拾って攻撃につなげるというシーンはほぼ無かった。その中でも、コンパクトにスライドされた逆のスペースへのロングボールがチャンスとなっていた。しかしながら、アップダウンの多いゲーム展開でサイドでは1vs1の攻防が多く、個の力で突破できなければゴール前へ侵入できない場面が多かった。また、アーリークロスにしてもゴール前へのパスは、ボックス内へ傾れ込む味方の数が少なく、ゴールおよびシュートの確率は低かった。お互い得点チャンスがないまま引き分けとなり PK 戦となったが、最も得点の可能性を感じたのは青森 5 番小沼のロングスローであった。

【神奈川県—大阪府】

次に行われた神奈川と大阪の試合では前の試合から一転して地上戦でのテクニカルな攻防が展開された。神奈川は川崎 F と横浜 M の選手が大多数を占め、Buildup からボールを大事に運んでゴール前へ迫る攻撃が多く見られた。大阪に関しても、興國高校と C 大阪の選手が過半数を占めており、中央からコンパクトな距離感でゴールに迫っていく攻撃が多く見られた。試合は神奈川がサイドの突破からクロスで先制し、後半立ち上がりには CK から追加点を上げ、立て続けにゴールを奪った。得点を奪う時間帯が良く、相手の出鼻を挫くような時間帯でのゴールで流れを相手に渡さなかったことも勝因の一つと言えるだろう。

神奈川の攻撃に関しては、4-2-3-1 で SB または SH が幅と高さを取り、相手の最終ラインを釘付けにしつつ、CB およびボランチのパススピードの伴ったボール回しで相手の1列目を越して2列目以降にフリーな状態で仕掛けていく、2列目が縦にスライドして奪いに来れば空いたトップ下の選手やサイドの高い位置の選手にミドルパスを繋ぎ、攻撃の起点を作っていた。クロスに対しては、先制した場面も含め、必ず1人ニアで勢いよく潰れるため、中央のスペースでボールを捉えることができていた。前の青森と北海道の試合に比べれば、クロスに対してボックス内に傾れ込んでくる選手の数は多かった。

【神奈川県—青森県】

決勝では、一転してチームとしてのプレースタイルが異なる青森と神奈川の対戦となった。

神奈川は自分達のスタイルを貫き、雨の中でさらに上がったパススピードのボール回しを展開し、青森ゴールに迫った。序盤は神奈川が攻撃のスイッチとして、相手のブロック内で浮いた10番にボールを集め、サイドの背後のスペースに SH および SB が湧き出てクロスを上げる攻撃が続いた。その中で展開後ゴール前に走り込んだ10番望月にクロスを合わせ神奈川が先制した。対して青森は序盤こそ10番望月の立ち位置に梶子摺る場面が続いたが、1,2列目を下げて相手にボ

ールを持たせ前向きでボールを奪って攻撃に繋げるセットディフェンスを敷いて追加点を許さなかった。その中でボールを奪い、サイドをオーバーラップした 5 番小沼からマイナスのクロスに 8 番浅野が走り込み、同点に追いついた。準決勝では、アップダウンの続く展開に中盤が疲弊して FW 頼みになり、ボックス内にかける人数が少なくなりがちだった青森だが、相手にボールを持たせてセットする時間帯ができたことで、前向きに奪った際に前に湧き出ていく余力のある選手が増え、ゴール前になだれ込む人数が増えたことも得点の要因として考えられる。

後半になって神奈川は両 SB が前半よりも幅と高さを取り、2列目の3枚が自由にローテーションしてポジションを変え、青森のブロックを押し込みながらゴールに迫った。

その後は両者譲らず、青森がミドルブロックを敷き、神奈川がブロックを揺さぶってゴールに迫るも得点が奪えない時間が続いたが、終盤に高い位置でボールを受けた右 SB14 番の加治佐がカットインしてブロック外からミドルシュートを放ちゴールを奪った。青森も人数をかけた神奈川の攻撃に耐えてはいたが、奪ったボールをカウンターに繋ぐことができず、終盤に、押し込んで 5 番小沼のロングスローでゴール前に迫るも肩の疲労からか精度を欠き、追いつくことはできなかった。今回青森は選ばれた全員が青森山田高校の選手であり、青森山田らしいプレーは随所に見られたが、粘った守備の後にカウンターに繋がられない場面やロングボールから FW が収めて押し込むことができない場面が多々見られ、まだ完全には青森山田になりきれていない印象を持った。

大会全体を通じて、やはり個人の能力は高いものを感じた。U-16 とは思えないフィジカルやキック力、技術が随所に見られたが、一方で連戦を通して疲労が見られ、後半に入ってからジャッジミスが目立った。認知・判断の部分や試合運びの部分にはまだ幼さが感じられ、その中でもそれらの部分が比較的完成されていた神奈川が結果として優勝を勝ち取ることができたと思われる。また、個で秀でた選手も少なく、ゴール前でブロックを敷かれた時にそれをこじ開ける選手はあまり見られなかった。

その中で最終的にゴールをこじ開けるプレーというのはバイタルで“足を振る”ことであり、決勝における 14 番加治佐のようなシュートが試合を決定づけるプレーであると思うが、その“足を振る”ということに積極的な選手は今大会ほとんど見られなかった。